



Title	An investigation of the effect of social reciprocity, social anxiety, and letter fluency on communicative behaviors in adults with autism spectrum disorder
Author(s)	木村, 友香理
Citation	大阪大学, 2021, 博士論文
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/82354
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

論 文 内 容 の 要 旨

氏 名 (木村 友香理)	
論文題名	An investigation of the effect of social reciprocity, social anxiety, and letter fluency on communicative behaviors in adults with autism spectrum disorder (自閉スペクトラム症成人における社会的相互関係, 社交不安症状, 文字流暢性がコミュニケーション行為に与える影響についての検討)
論文内容の要旨	
〔 目 的 〕 自閉スペクトラム症(ASD)のコミュニケーションの困難性は, ASDが元来有する社会的相互関係の困難性のほか, 重篤な社交不安症状や, 言語流暢性の低下との関連性があることが, ASD児や不安症児を対象にした研究において報告されている(Dicher et al., 2009; Eussen et al., 2012; Halls et al., 2015; Hus et al., 2013; Toazza et al., 2014, 2016). しかし, それら一連の関連性および因果関係について, 報告されているものはない. そこで, 本研究ではASD成人において, 社会的相互関係の困難性, 重篤な社交不安症状, 文字流暢性の低下がコミュニケーション行為に与える影響について明らかにし, 定型発達(TD)成人と比較することを目的とした. 検討に当たり, 先行研究をもとに, コミュニケーション行為を目的変数, そして社会的相互関係, 社交不安症状, 文字流暢性を説明変数としたパス(仮説モデル)を設定した. 〔 方法ならびに成績 〕 知的能力を統制したASD成人33名(男性23名, 女性10名, 年齢:27.88±6.23歳; FSIQ±SD:105.76±10.62; VIQ±SD:108.24±11.61), TD成人35名(男性21名, 女性14名, 年齢:28.03±5.88歳; FSIQ±SD:106.46±11.43; VIQ±SD:105.86±13.96)が本研究に参加した. 参加者に社会的相互関係(Social Responsiveness Scale Adult version; SRS), 社交不安症状(Self-Report version of the Liebowitz Social Anxiety Scale; LSAS), コミュニケーション行為(Communication Checklist—Self-Report; CC-SR)について評価する自己記入式質問紙と, 文字流暢性課題を実施した. 解析については, 各群・各指標において記述統計を実施後, 相関を確認した. その後, 仮説モデルについて, 共分散構造分析を用いてパス解析を行った. スピアマンの順位相関係数の結果は, ASD群においてはSRS得点とLSAS恐怖得点, SRS得点とLSAS回避得点, SRS得点とCC-SR得点, LSAS恐怖得点とLSAS回避得点, LSAS恐怖得点とCC-SR得点, LSAS回避得点と文字流暢性課題合計正答数, LSAS回避得点とCC-SR得点との間に相関を認めた. TD群においては, SRS得点とLSAS恐怖得点を除き, 全ての指標間で相関を認めた. パス解析の結果は, ASD群における仮説モデルの適合度は, GFI=0.995, AGFI=0.920, CFI=1.000, RMSEA<0.001であった. ASD特有の社会的相互関係の困難性が, 直接的にコミュニケーション行為の困難性を生じさせるだけでなく, 間接的に社交不安症状(恐怖)を介してコミュニケーション行為の困難を生じさせることが示された. 文字流暢性については, 他の指標と有意な関連が認められなかった. 一方, TD群の仮説モデルの適合度は, GFI=0.963, AGFI=0.439, CFI=0.958, RMSEA=0.270であり, 項目間で有意な関連が見られた部分はあるが, 仮説モデルには適合しなかった. 〔 総 括 〕 本研究の結果から, ASD成人において, 社会的相互関係の困難がコミュニケーション行為の困難に影響を与えるほか, 社交不安症状を誘発・悪化させること, そして社会的相互関係の困難が社交不安症状を介してコミュニケーション行為の困難に影響を与えていることが明らかになった. 対照的に, TDにおいては仮説モデルの適合度が低かったことから, ASD成人とTD成人とで, コミュニケーション行為のパターンが異なっていることが示唆された. ASD群のコミュニケーション行為の困難は, 元来有する社会的相互関係の困難による影響のほか, 社交不安症状も影響しており, 社交不安症状の軽減をはかる治療や環境調整によりASD者のコミュニケーション行為の困難性が軽減する可能性が考えられた.	

論文審査の結果の要旨及び担当者

氏 名 (木村 友香理)		
論文審査担当者	(職)	氏 名
	主 査 教授	平野 好幸
	副 査 教授	小林 宏明
	副 査 特任准教授 (常勤)	橘 雅弥

論文審査の結果の要旨

本論文は、自閉スペクトラム症 (ASD) 成人において、社会的相互関係の困難性、重篤な社交不安症状、文字流暢性の低下がコミュニケーション行為に与える影響について明らかにし、これらを定型発達 (TD) 成人と比較検討が行われている。

ASD のコミュニケーションの困難性は、ASD が元来有する社会的相互関係の困難性のほか、重篤な社交不安症状や、言語流暢性の低下との関連性があることが、ASD 児や不安症児を対象にした研究において報告されている (Dicher et al., 2009; Eussen et al., 2012; Halls et al., 2015; Hus et al., 2013; Toazza et al., 2014, 2016)。これらの先行研究をもとに、コミュニケーション行為を目的変数、そして社会的相互関係、社交不安症状、文字流暢性を説明変数としたパス (仮説モデル) を設定して検討が行われた。

知的能力を統制した ASD 成人 33 名 (男性 23 名、女性 10 名、年齢: 27.88 ± 6.23 歳; $FSIQ \pm SD: 105.76 \pm 10.62$; $VIQ \pm SD: 108.24 \pm 11.61$)、TD 成人 35 名 (男性 21 名、女性 14 名、年齢: 28.03 ± 5.88 歳; $FSIQ \pm SD: 106.46 \pm 11.43$; $VIQ \pm SD: 105.86 \pm 13.96$) が本研究に参加した。参加者に社会的相互関係 (Social Responsiveness Scale Adult version; SRS)、社交不安症状 (Self-Report version of the Liebowitz Social Anxiety Scale; LSAS)、コミュニケーション行為 (Communication Checklist—Self-Report; CC-SR) について評価する自己記入式質問紙と、文字流暢性課題が実施された。解析については、各群・各指標において記述統計を実施後、相関が確認された。その後、仮説モデルについて、共分散構造分析を用いてパス解析が行われた。

スピアマンの順位相関係数の結果は、ASD 群においては SRS 得点と LSAS 恐怖得点、SRS 得点と LSAS 回避得点、SRS 得点と CC-SR 得点、LSAS 恐怖得点と LSAS 回避得点、LSAS 恐怖得点と CC-SR 得点、LSAS 回避得点と文字流暢性課題合計正答数、LSAS 回避得点と CC-SR 得点との間に相関を認めた。TD 群においては、SRS 得点と LSAS 恐怖得点を除き、全ての指標間で相関を認めた。

パス解析の結果は、ASD 群における仮説モデルの適合度は、 $GFI=0.995$ 、 $AGFI=0.920$ 、 $CFI=1.000$ 、 $RMSEA < 0.001$ であった。ASD 特有の社会的相互関係の困難性が、直接的にコミュニケーション行為の困難性を生じさせるだけでなく、間接的に社交不安症状 (恐怖) を介してコミュニケーション行為の困難を生じさせることが示された。文字流暢性については、他の指標と有意な関連が認められなかった。一方、TD 群の仮説モデルの適合度は、 $GFI=0.963$ 、 $AGFI=0.439$ 、 $CFI=0.958$ 、 $RMSEA=0.270$ であり、項目間で有意な関連が見られた部分はあるが、仮説モデルには適合しなかった。

本研究において、ASD 成人において、社会的相互関係の困難性がコミュニケーション行為の困難性に影響を与えるほか、社交不安症状を誘発・悪化させること、そして社会的相互関係の困難が社交不安症状を介してコミュニケーション行為の困難に影響を与えていることが明らかになった。対照的に、TD においては仮説モデルの適合度が低かったことから、ASD 成人と TD 成人とで、コミュニケーション行為のパターンが異なっていることが示唆された。ASD 群のコミュニケーション行為の困難性への支援については、社会的相互関係の困難性の理解とともに、社交不安の軽減も必要であるという結果から、恐怖感の強い ASD 者に対する社交不安を軽減することでコミュニケーション行為の困難を軽減できる可能性、社会的相互関係の困難に対する支援や二次障害としての社交不安を予防するために早期からの療育支援や、いじめ予防・正の学習経験・失敗しても大丈夫だといった経験などを積むことの有効性を提言できるといえる。

したがって、本論文を、博士 (小児発達学) の学位に値するものと認める。